様式Ｃ－１９

# 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 1 日現在

機関番号：14403
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2009～2011
課題番号：21530725
研究課題名（和文）　中学生における無気力感パターン別援助プログラムの開発
研究課題名（英文）　Development of a support program for junior high school student's helplessness according to the pattern.

研究代表者
牧　郁子（MAKI IKUKO）
大阪教育大学・教育学部・准教授
研究者番号：70434545

研究成果の概要（和文）：
研究１ではＡ中学校（進学校）とＢ中学校（学力困難校）で調査を実施した結果，学校風土によって無気力感パターンに違いがあることが示唆された。研究２は研究１の結果から，特定の中学校における生徒の無気力感パターン検証を行い，その結果と，結果に基づく対処方法についてまとめたプログラム冊子を作成したうえで研修を行い,教員へのフィードバックを行った。研修に関するアンケートの結果，９割の教員から「生徒理解に役立った」「生徒への具体的対応のヒントになった」との回答を得た。

研究成果の概要（英文）：
The results of Study 1, an investigation of the patterns in feelings of helplessness at junior high school “A” (which had more high-achievement students) and junior high school “B” (which had more low-achievement students), revealed patterns that differed with the climate of the school. Study 2 used the results of Study 1 to inspect the patterns in feelings of helplessness of students at a specific junior high school. A pamphlet was created containing the results of Study 2 and a coping strategy based on the results, and was then used in teacher training. A survey to gather teachers' feedback was conducted, to which 90% responded that the pamphlet “was helpful in understanding students” and “provided concrete insights towards offering support to students.”

交付決定額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合　計 |
|---|---|---|---|
| 2009 年度 | 1800,000 | 540,000 | 2,340,000 |
| 2010 年度 | 500,000 | 150,000 | 650,000 |
| 2011 年度 | 500,000 | 150,000 | 650,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総　計 | 2,800,000 | 840,000 | 3,640,000 |

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：心理学・臨床心理学
キーワード：心理学的介入、学校臨床心理学

１．研究開始当初の背景

学童期から思春期への移行期にあたる中学生は，クラス活動・部活への参加など集団・組織への社会化と，自分らしさの獲得という個人化の二項対立的な発達課題を同時に達成することが求められる時期である（伊藤，2001）。加えて身体が急激に発達し生物的変化が著しく，また学習内容の難化・友人

関係の複雑化といった環境的変化も経験する，ストレスフルな時期であるといえる。加えてこの時期の子どもは，コーピング・スキルの乏しさからこうした急激な変化が心配や混乱に結びつきやすく（Schinke et al., 1987），また行動と結果の随伴性判断がより現実的になることから，主観的なコントロール感が減少することが指摘されている（鎌原・樋口，1987；Weisz & Stipek, 1982）。このように中学生は，内面的にも環境的にもストレスフルな状況に置かれやすく，しかも行動に対する成果が実感されない経験が蓄積されやすく，自己や環境に対するコントロール感を失い，無力感に陥りやすい時期であるといえる。こうした環境からの応答性の欠如という状況は，無気力感の説明理論である学習性無力感理論（learned helplessness；Seligman & Maier, 1967：以下「ＬＨ理論」）における，自身の行為で結果をコントロールできない非随伴的状況であるといえる（水口，1993）。こうしたことから牧・関口・山田・根建（2003）は，こうした中学生の無力感のメカニズムを検討するため，自分の行動と結果が随伴しているかどうかについての認知である，随伴性認知（Seligman & Maier, 1967）を中学生の無気力感の大きな要因として想定し，無気力感のメカニズムを検討するために中学生版・主観的随伴経験尺度（PECS）を作成した。その結果，随伴経験（自分の行動で結果をコントロールできた経験）と非随伴経験（自分の行動で結果をコントロールできなかった経験）の２因子が抽出され，従来 LH 理論において殆ど取り上げられて来なかった随伴経験因子が見出されたことに加えて，この２因子に殆ど相関がないことが確認された。このことから，先行研究において一次元的に捉えられてきた随伴経験と非随伴経験は，中学生においては，認知される主観的な量には相関関係がなく，独立した概念として個人の中に存在している可能性が示唆された（牧ら，2003）。さらに牧・関口・根建（2006）および牧・関口・野村・根建（2007）は，中学生の無気力感を構成する変数として，随伴経験・非随伴経験に加えて，コーピング・エフィカシー（ストレス事態における対処行動への自信）と，Beck（1967）の抑うつスキーマ理論における推論の誤りを参照した思考の偏りといった変数を新たに想定して，パス解析によるモデル検証を行った。その結果，随伴経験の乏しさ→コーピング・エフィカシーの減少→無気力感の経路と，非随伴経験によって教師への偏った思考・友人関係における偏った思考・自己への偏った思考が形成され，この３つの思考の偏りが勉強における偏った思考に影響を与え，自己への偏った思考とともに無気力感へつながるパスが認められ，モデルの妥当性が確認された（牧ら，2007）。以上のことからから，中学生の無気力感は，随伴経験の乏しさから形成されるコーピング・エフィカシーの低さと，非随伴経験から形成される人間関係における思考の偏りを経由した，勉強における思考の偏り・自己への偏りの高さとの２つの経路で，形成されている可能性が示唆された。

２．研究の目的

（1）　中学生における無気力感の個人差要因に着目した，より精緻な介入方略の構築

牧ら（2003，2006，2007）により，中学生の無気力感の構成要因として，行動で結果をコントロールできたかどうかの認知である随伴経験・非随伴経験といった変数と，ストレス事態への対処の自信であるコーピング・エフィカシー，そして生活場面での推論の誤りを測定する思考の偏りという変数が関与している可能性が示唆されてきた。そして随伴経験の欠乏がコーピング・エフィカシー低減につながり無気力感を増加させる経路と，非随伴経験の多さが思考の偏りの高まりにつながり無気力感の増加に至る経路からなる，中学生における無気力感モデルが検証された（牧ら，2007）。しかしモデルの検証は中学生の一般的な無気力感の構造を示唆するものであり，個人にあった援助方法を検討するためには，無気力感パターンをより詳細に検証する必要があると考えられる。さらに近年，子どもの行動の背景に，学校風土の違いを要因として踏まえる観点が示唆されていることから（伊藤・松井，2001；加藤・大久保，2004），本研究では学校風土の違う中学校における無気力感パターンを分析し，その結果に基づく援助方法の違いを検討する。さらに，生徒への質的調査も併せて実施し，量的に抽出された無気力感パターンの妥当性の検討も行う。

（2）無気力感パターン別介入方略と教員へのフィードバックシステムの構築

個々の学校風土に基づく無気力感パターン別の改善要因を統計的に検証した上で，それに基づく援助方法案をまとめた，フィードバック冊子を作成する。

そして作成したフィードバック冊子をもとに，教員研修を行い，無気力感の高い自校生徒の理解と，学校風土にあった無気力感予防の提案を併せて行う。

３．研究の方法

**(1) 中学生における無気力感パターンの抽出と妥当性の検討**

**① 中学生における無気力感パターンの抽出**

【被調査者】
関西圏のＡ中学校（進学校）とＢ中学校（学力困難校），2 校の協力を得て，中学１～3 年生までの男女を対象に分析を行った。内訳は，Ａ中学校（男子＝209 名，女子＝221 名），Ｂ中学校（男子＝167 名，女子＝41 名）であった。
【手続き】
中学生版・主観的随伴経験尺度（牧・関口・山田・根建，2003），中学生用コーピング・エフィカシー尺度（CES；牧・関口・根建，2006），中学生用・思考の偏り尺度（BTS；牧・関口・野村・根建，2007），無気力感尺度（笠井・村松・保坂・三浦，1995）を実施した。

**② 無気力感パターンの妥当性の検討**

【被調査者】
関西圏のＢ中学校（学力困難校）の協力を得て，中学１～3 年生までの男女を対象に分析を行い，無気力感得点の上位 25%を高群，下位 25%を低群として抽出し，分析を行った。

【手続き】
統計的に抽出された無気力感パターンの妥当性の検討を質的に行うために，記述調査を行った。具体的には， 以下のような教示と選択肢，および自由記述内容を実施した。

＜無気力感の形成要因に関する問い＞
（Q1）として「あなたが今やる気がでないな…と思うのはどのような場面でしょうか？下記の選択肢の中から，最も当てはまるものに 1 つ○をおつけください」と教示し，a. 勉強 b.友人関係 c.部活 d 委員会活動 e.先生との関係 f.その他のうちから選択させた。
続いて（Q2）として，「Q1 で回答した場面での “やる気がでないな”と思う理由は何だと思いますか？」と教示し，「 a. 何とかする自信がないから（コーピング・エフィカシーに対応），b. どうせうまくいかないと思うから（思考の偏りに対応），c. “何とかする自信”もないし，“どうせうまくいかない”とも思うから（コーピング・エフィカシーと思考の偏りに対応）， d. その他」のうちから選択させた。

＜無気力感パターンと行動化との関連性＞
（Q3）として，「うまくいかない出来事に出会った時，あなたは何とかしようと行動する方でしょうか？下記の選択肢の中から，当てはまるものに○をおつけください」と教示し，「a. 行動する，b. わりと行動する， c.それほど行動しない， d.ほとんど行動しない」のうちから１つ選択させた。
続いて「行動する・わりと行動する」と答えた生徒には，「どうして行動するのだと思いますか？」について， 「それほど行動しない・ほとんど行動しない」と答えた生徒には，「どうして行動しないのだと思いますか？」について，自由記述をさせた。

＜無気力感と援助志向性の検討＞
（Q4）として，「あなたが落ち込んだ時，どのような援助があったらいいなと思いますか？ 」と教示し，自由記述をさせた。

**(2) 無気力感パターン別介入方略と教員へのフィードバックシステムの構築**

【被調査者】
無気力感調査
関西圏の公立 C 中学校の協力を得て，中学１～3 年生までの中学１～3 年生までの男女を対象に分析を行った。内訳は，１年男子 35 名，女子 29 名，２年男子 23 名，女子 31 名の計 118 名であった。

研修参加者
関西圏の公立 C 中学校の教諭・講師計 15 名（男性９名，女性６名）。
【手続き】
まず当該中学校の生徒対象に，中学生版・主観的随伴経験尺度（牧・関口・山田・根建，2003），中学生用コーピング・エフィカシー尺度（CES；牧・関口・根建，2006），中学生用・思考の偏り尺度（BTS；牧・関口・野村・根建，2007），無気力感尺度（笠井・村松・保坂・三浦，1995）を実施した。そしての学年×性別に無気力感高群を抽出し，無気力感パターンをクラスター分析によって検証し，その結果と結果に基づく対処方法のヒントについて記載したプログラム冊子を作成した。続いてそのプログラム冊子を用いて，研修という形で教員へのフィードバックを行った。

４．研究成果

**(1) 中学生における無気力感パターンの抽出と妥当性の検討**

**① 中学生における無気力感パターンの抽出**

**結果**

Ａ中学校およびＢ中学校それぞれのデータにおいて，無気力感の総合得点が上位 25%以上の群を無気力感高群とし，全体データおよび各群における指標の平均得点を算出した上で，以下の分析を行った。まず無気力感高群において Ward 法によるクラスター分析を行った結果，Ａ中学校では 4 クラスターに，Ｂ中学校では 2 クラスターに，分類された（Fig.1，2）。Ａ中学校における Clus1 は，非随伴経験と思考の偏りが高く「認知の歪み型無気力感」と考えられた。また Clus2 は，指標が全般的に平均値を下回っていることか

ら，「行動化低群」と考えられた。また Clus3 は，非随伴経験・教師と勉強に関する思考の偏りがやや高い「認知の歪み優位型無気力感」と考えられた。さらに Clus4 は，随伴経験とコーピング・エフィカシーがともに低い「動機づけ低下型無気力感」と考えられた。一方Ｂ中学校における Clus1 は，随伴経験とコーピング・エフィカシーがやや低く，勉強における偏った思考がやや高いことから「学力不振型無気力感」と考えられ，Clus2 は非随伴経験・思考の偏りが高く，随伴経験とコーピング・エフィカシーが低いことから「認知の歪み・動機づけ低下混合型無気力感」と考えられた。

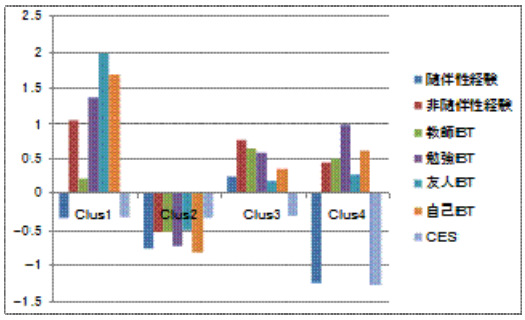


Fig. 1
Ａ中学校（進学校）の無気力感高群分類結果

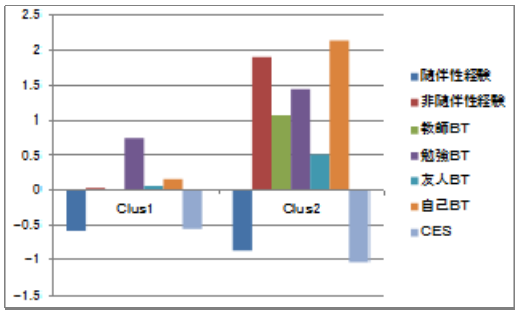


Fig. 2
Ｂ中学校（学力困難校）の無気力感高群分類結果

## 考察

Ａ中学校では４つのクラスターが，Ｂ中学校では２つのクラスターが抽出され，いずれも同じパターンの無気力感ではないことが示唆された。Ａ中学校は，生徒によって無気力感の要因が多様であり，現場で生徒の援助を行う際に，認知の歪み，動機づけの低下，行動そのものの低下いずれの側面が主要因になっているか検討する必要がある。一方Ｂ中学校は，無気力感の背景にある要因は多様ではないが，際立った随伴・非随伴経験のないことが特徴の Clus1 と，非随伴経験の多さが特徴の Clus2 では，有効な援助が違うものと考えられる。以上のことから，学校風土によって無気力感パターンには違いがあり，有効な関わりも違う可能性が示唆された。

## ② 無気力感パターンの妥当性の検討

### 結果

＜無気力感の形成要因に関する問い＞

（Q1）として「あなたが今やる気がでないな…と思うのはどのような場面でしょうか？下記の選択肢の中から，最も当てはまるものに１つ○をおつけください」と教示した結果，学力不振型無気力感群は，やる気の出ない分野の 55%が勉強と回答し，続いて友人関係・委員会活動が 15%，部活が 10%，その他が 5%という結果となった。一方認知の歪み・動機づけ低位型群も，最も勉強場面が多く 50%となったが，続いてその他が 30%，友人関係・部活が 10%，委員会活動０％という結果となった。なおいずれも先生との関係は０％であった。続いて（Q2）として，「Q1 で回答した場面での　“やる気がでないな”と思う理由は何だと思いますか？」と教示した結果，学力不振型無気力感群（Fig. 5）は，その他が 48%で最も多く，続いて「どうせうまくいかないと思うから」が 29%，「何とかする自信がないから」が 14%，「何とかする自信”もないし，“どうせうまくいかない”とも思うから」が 10%という結果となった。一方，認知の歪み・動機づけ低下混合型無気力感群においても，その他が 67%で最も多く，続いて「どうせうまくいかないと思うから」が 22%，「何とかする自信”もら」は 0%であった。ないし，“どうせうまくいかない”とも思うから」が 11%で，「何とかする自信がないから」は 0%であった。

＜無気力感パターンと行動化との関連性＞

さらに（Q3）として，「うまくいかない出来事に出会った時，あなたは何とかしようと行動する方でしょうか？」と教示した結果，学力不振型無気力感群では「わりと行動する」が 67%で最も多く，続いて「行動する」「ほとんど行動しない」が同じ 14%，「それほど行動しない」が 5%という結果となった。一方，認知の歪み・動機づけ低下混合型無気力感群では，「わりと行動する」が同様に最も多く 44%，次いで「行動する」が 33%，「それほど行動しない」が 22%，「ほとんど行動しない」が 0%であった。

続いて「行動する・わりと行動する」と答えた生徒には，「どうして行動するのだと思いますか？」について，　「それほど行動しない・ほとんど行動しない」と答えた生徒には，「どうして行動しないのだと思いますか？」について，自由記述をさせた。その結果，「行動する・わりと行動する」と回答した生徒の自由記述回答は，学力不振型無気力感群においては，「将来への目標」「自己改善努力」「将来への備え」「対処しないことへの違和感」といった分類がなされた。また認知の歪み・動機づけ低下混合型無気力感群にお

いては，「気分向上のため」「価値観」「将来への備え」「対処しないことへの違和感」「自己改善努力」といった分類がなされた。
一方，「それほど行動しない・ほとんど行動しない」と答えた生徒で学力不振型無気力感群においては「対処行動の困難」「対処行動の選択肢のなさ」「対処行動への動機づけの低さ」といった分類が，認知の歪み・動機づけ低下混合型無気力感群においては，「理由不明」「対処不可能性」といった分類がなされた。

＜無気力感と援助志向性の検討＞
最後に（Q4）として，「あなたが落ち込んだ時，どのような援助があったらいいなと思いますか？ 」と教示し，自由記述をさせた。その結果，学力不振型無気力感群においては，「応援」「学習援助」「相談」「非干渉」「なぐさめ」「見守り」「受容」といった分類がなされた。一方，認知の歪み・動機づけ低下混合型無気力感群においては，「応援」「学習援助」「相談」「非干渉」「見守り」「具体的対処」といった分類がなされた。

## 考察

学力不振型無気力感群は，やる気の出ない分野の 55%が勉強と回答していることから，ある程度クラスター分析による分類の妥当性が裏付けられた結果となった。一方認知の歪み・動機づけ低位型群も，最も勉強場面が多く 50%となったが，続いてその他が 30%といった結果となった。学力不振型ではその他が 5%であったことを踏まえると，認知の歪み・動機づけ低位型群の生徒は単に学校場面における経験的無気力感だけでなく，家庭など学校以外に起因する無気力感も，その要因として考慮に入れる必要性があると考えられる。
また「やる気の出ない理由」については，学力不振型無気力感群・動機づけ低下混合型無気力感群ともに，「どうせうまくいかないと思うから」が「何とかする自信”もないし，“どうせうまくいかない”とも思うから」がほぼ同じくらいであった。一方，「何とかする自信がないから」は学力不振型無気力感群では 14%あったが，認知の歪み・動機づけ低下混合型無気力感群では 0%であった。この結果から，2 つの群とも，思考の偏りに対応させた選択肢である「どうせうまくいかないと思うから」が含まれ，コーピング・エフィカシーと思考の偏りに対応させた選択肢である「何とかする自信”もないし，“どうせうまくいかない”とも思うから」も含まれていた。群によってこの 2 つの設問の回答に違いが認められなかったのは，「どうせうまくいかないと思うから」に，非随伴経験の多さからくる思考の偏り的要素だけでなく，随伴経験の少なさからくるコーピング・エフィカシーの低さ（行動への自信のなさ）も，反映された可能性が考えられる。ただ「何とかする自信がないから」において，学力不振型無気力感群においては回答が認められ，認知の歪み・動機づけ低下混合型無気力感群に回答が認められなかったのは，前者の随伴経験の少なさからくるコーピング・エフィカシーの低さを反映した結果とも考えられ，クラスター分析結果の妥当性が一部支持されたと考える。
続いて「うまくいかない出来事に出会った時，あなたは何とかしようと行動する方でしょうか？」という設問に対して，学力不振型無気力感群では 81%が，動機づけ低下混合型無気力感群では 77%が「わりと行動する」「行動する」と回答していることから，本研究においては無気力感高群であっても，必ずしも行動化をしないわけではないことが示された。さらに「行動する・わりと行動する」と回答した生徒に「どうして行動するのだと思いますか？」と回答を求めた結果は，学力不振型無気力感群・認知の歪み・動機づけ低下混合型無気力感群ともに，「将来への備え」「対処しないことへの違和感」「自己改善努力」が認められた。以上の結果から，随伴経験が少なくコーピング・エフィカシーが低かったり，非随伴経験が多く思考の偏りが高い傾向にあっても，将来を見据えて，成長しようという気持ちから，対処行動をする生徒が少なくないことが示唆された。
最後に，無気力感と援助志向性に関して考察する。学力不振型無気力感群・認知の歪み・動機づけ低下混合型無気力感群において共通していたのが，「応援」「学習援助」「相談」「非干渉」「見守り」であった。
この結果から無気力感の高い生徒は，具体的援助だけでなく，そうした問題に直面した自分の気持ちを支える援助へのニーズがあることが示唆された。また両群とも「非干渉」といった分類が検証され，無気力感が高い状況であっても，必ずしも周囲の援助を求めていない状況もあることが示唆された。このことは，中学生が大人からの精神的自立への一歩を踏み出す思春期であることを踏まえると，まず誰かの助けを求めるのではなく，自分の力で解決したいといった子どもの欲求が反映されているとも考えられる。こうしたことから，教師や親は，当該生徒に具体的援助が必要な状況なのか，自分で解決することを支える援助が必要な状況なのかを踏まえた上で，対応する必要性があることが示唆されたと考える。
一方学力不振型無気力感群は「学習援助」の回答が多かった。また認知の歪み・動機づけ低下混合型無気力感群では「相談」において「話を聞いてほしい」との回答が多かったことから，話を聞いてもらいながら，自身の

考えをまとめることへのニーズが高い可能性が示唆された。以上の結果から，学力に関する問題，思考の偏りに関する問題がそれぞれ顕著である各群の，群わけの妥当性が，ある程度支持されたと考える。

**研究２　無気力感パターン別介入方略と教員へのフィードバックシステムの構築**

**結果**

公立中学校 C 中学校に協力を依頼し，中学１年生・２年生の男女生徒を対象に調査を行い，学年×性別に，無気力感高群を抽出し，無気力感パターンをクラスター分析によって検証した。続いてその結果と結果に基づく対処方法のヒントについて記載したプログラム冊子を作成し，それを用いて，研修という形で教員へのフィードバックを行った結果，９割の教員から「生徒理解に役立った」「生徒への具体的対応のヒントになった」との回答を得た。

**考察**

本研究は，研究１の結果を踏まえて，当該中学校における学年×性別に無気力感パターンを抽出し，そのパターンに基づいて，無気力感の高い生徒への対処方法を，研修を通じてフィードバックするシステムの構築を試みた。結果にあるように，大方の参加教員は研修プログラムに対して肯定的な意見であったが，一部，「無気力感のパターン化は全体の傾向はわかるが，個々の生徒のイメージと結びつきにくい」との意見もあった。こうしたことから今後は，生徒の主観的回答に基づく無気力感のパターン化だけでなく，個々の生徒の客観的情報（出席率・成績・生活態度・部活での様子・家族状況）も踏まえた上で，より具体的に個々の生徒に合わせた対処方法をフィードバックできるシステムを構築する必要があると考える。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

牧　郁子（2011）.中学生における無気力感の予防・対処要因－時間的・性別要因を入れた検討　カウンセリング研究，44，136-147.

〔学会発表〕（計１件）

牧　郁子（2011）.無気力感パターン別援助メカニズムの検討－学校風土の違いに着目して－　日本心理学会第 75 回大会（日本大学）.

６．研究組織
(1)研究代表者

牧　郁子（MAKI IKUKO）
大阪教育大学・教育学部・准教授
研究者番号：70434545

(2)研究分担者
（なし）

研究者番号：

(3)連携研究者
（なし）

研究者番号：